

教員の自己点検・評価シート(2022年度秋学期)の分析

2023年 7月 12日
教学マネジメント会議

教養教職機構

1. 全体的な傾向

- ・ 各教員が授業科目レベルにおける自己点検により明らかになった自身の課題について、その改善に取り組んでいることが確認できる。
- ・ 全体的に、多くの科目において授業における効果的なICT活用を模索し、学生の理解や取組において有用性を実感する記述が多くみられる。
- ・ コロナ禍の状況を注視しながらも、対面授業における協同的な学びやアクティブラーニングを取り入れ、学生が実感をもって学べるよう授業の工夫・改善に取り組んでいる記述が多くみられる。
- ・ 全般的に、学生の「授業アンケート」の回答率の低さを指摘する教員の記述が見られる。

2. 特筆すべき事例等

- ・ 全ての科目において、学生の学修に対する動機づけを高める工夫がみられる。(身近な事例や学生が実感を伴うテーマの設定、写真や動画等の活用、PPの活用やICTを活用した学びの提供、ミニッツペーパーの活用等)
- ・ 語学領域における「学力差」に対して、様々な手立ての工夫や個に応じた丁寧な指導の提供がなされている。(学生の学びにくさに対して、課題の提出方法や板書等の工夫、課題提示の方法等、教員の試行錯誤や工夫が確認できる。)
- ・ 学生の能動的な学びを促進しようと意図的にアクティブラーニングを取り入れた科目も多く見受けられる。

3. 改善事項の発掘

- ・ アカデミックライティングにおいては、一つの科目で完結することはなく、4年間を通して様々な科目で横断的に身につけていくものであるとする指摘がある。
- ・ 語学学習(英語)において、能力差を指摘する記述がみられるが、定着度や能力差に対する分析の必要やクラス分けやシラバス等、今後、求められる4技能5領域の観点から工夫・改善の余地があると考えられる。

4. アクションに向けての要検討事項等

- ・ 学生の授業評価アンケートの実施・回収率向上の方策
- ・ 各科目における学生の学修意欲向上に向けた工夫・改善

- ・ アカデミックライティング等の習得のための授業科目における連続性や横断的な取り組みに向けた連携・調整等の在り方の検討

経済学部

1. 全体的状況の把握

- ・ 自己点検・評価シートを通じ、各教員が各科目の点検・改善に取り組んでいることが確認できた。

2. 良い事例の発掘

- ・ 学生の関心を高める工夫の取り組みが多く見られた。代表的なものとしては、スライド・ビジュアル資料を用いた具体的事例の紹介、身近な事例に関連付けた解説、データなどの時点修正による最新の情報の紹介などがあった。
- ・ 何らかのアクティブラーニング的取り組みを行っている科目も多い。ミニッツペーパーの取り組みが多いが、グループ討議を導入している科目もある。
- ・ 小テスト・レポートに対するコメントの紹介などを通じて、学生との双方向性を確保しようとする例も見られた。

3. 改善事例の発掘

- ・ 今回も、統計・数学の理解が十分でない学生がいるとの指摘が散見された。関連して、限界・余剰概念をはじめとするミクロ経済の理解が十分でない学生がいるとの指摘があった。これについては、2023 年度入学者より行った経済数学・ミクロ経済学の配当学期の見直しを行った効果を注視する必要がある。
- ・ 理解度のみならず、学習に対する意欲・積極性について、学生間で大きな差があるとの指摘が散見された。特に専門演習で、グループ学習へのフリーライダー問題への対応や、卒業論文の着手が遅くなっている傾向の指摘が、複数の教員から指摘されている。

国際交流センター

- ・ 多様なレベルの受講生がいるため、受講生のレベルを把握するための時間が必要であるという課題はあげられているものの、多くの講義において、受講生のレベルに合わせて柔軟に講義内容を変更させていることがうかがえる。
- ・ Google classroom の添削機能を活用し、講義時間外でも学生のフォローを可能にしているという事例もあった。